
理化の解答（仮）

アオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理化の解答（仮）

【Nコード】

N4434BA

【作者名】

アオ

【あらすじ】

化学、数学に秀でた青年、空理化が、先祖代々引き継がれてきたある機械を使い、失敗を帳消しにしていることとするが、その機械を使うにはいろいろ制約があり・・・

プロローグ

一人の女子が微笑みながら話かけてくれる。
俺が好きな女子だ。

女子は何気ないことを聞いてくる。昨日見たテレビのこと、夕食のこと、テストの点数はどうだったか。

俺はその問いに、スラスラと答えていく。好きな女子の前なのに、取り乱すこともなく、スラスラと。

まるで、一度話したことがあるかのように。

女子は、いつもと様子の違う俺に違和感を持ったようだが、そのまま違う人の輪の中に入ってしまふ。

男は机の杖に肘をつき、空を見上げる。

空には飛行船が浮いている。ここらでは滅多に見かけない。

数人の男子が飛行船に気づき、窓側に走り寄っていく。

男は、興味がないのか、すぐに視線を逸らしてしまふ。まるで、一度同じ風景を見ているかのように。

男は教室の前の方の出入り口に視線を移し、席から立ち上がる。

そのまま、その扉に向かい、ドアを開ける。

一人の女子が驚きながら見上げてくる。

俺の幼馴染だ。

女子は驚いた顔を、すぐに申し訳なさそうな顔にし、口を開こうとした。

男は、手に持っていた数学の教科書を差し出す。

女子はさっきよりも驚いた顔になり、「どうしてわかったの?」と話かけてくる。

男は「勘だ。」と、素っ気無く言うと、教科書を渡し、扉を閉めた。そして男は自分の席に戻っていく。

その男の、まるで、一度体験したことがあるかのような行動に気づいたのは、たった一人だった。

プロローグ（後書き）

友達に誘われ、書いてみました。

まったく出来の悪い、拙い文章ですが、見てもらえればうれしい限りです。

感想や、評価をいただけると、最高です。

一日を楽しくする方程式

人間の体はよく出来ていると思う。肝臓や腎臓、心臓などはもちろん。爪や髪にまでしっかりと役割がある。

たとえば、耳だ。

小学生ぐらいの時、一度くらいは、「なんで耳なんてあるんだろう……？」と思ったりしたことはないだろうか。

耳というのは、周りの音を集める集音機の役割をしているのだ。どの方向から音が飛んできたか、俺たちは感じる事ができる。

だが、耳がないと、どこから音が飛んできたかわからない。さらに、前や後ろから声をかけられても、聞こえないのだ。

耳というのは、立派な役割を担っている。とても高性能な集音機として活躍している。

だが、高性能すぎることが仇になることもある。そう、超近距離で叫ばれると、全ての音を拾ってしまう。

「起きろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

目は覚めた、だけど鼓膜を通して脳が揺さぶられ、何がなんやらまったく理解が得られない。

目を動かし、自分の脳を揺さぶった犯人を捜す。

白い天井が目に入り、次に茶色い髪の毛が目に入る。そして最後に美しく整った顔が目に入った。

目は少し釣り目で、鼻筋がきれいに通っている。化粧つきの無い顔なのに、頬には朱が挿している

肩口ほどの茶髪を後ろに掻き分けるその姿は、芸術品のような美しさを醸し出している。

自分の姉をここまで褒めちぎるのは気持ち悪いかもしれない。え？ シスコン？と思われても仕方がないだろう。

だが、姉は弟にそこまで言わせるほどに、容姿に恵まれている。

「ちっ、おき・・・」

「起きてるよ！起きてる！つつか目開いてるんだからわかるだろ！？」

姉の小さな口が耳元に近づいてきた瞬間、バネ人形のように跳ね起きる。

「はい、おはよう。美しいお姉さまが起こしにきてあげましたよ」

「ありがとうございます、お姉さま。内面が少し汚れてらっしゃいますが、どうし・・・すみませんすみませんすみませんすみませんすみません」

姉のコブラツイストがきれいに決まる。なかなか豊満なバストが頭に当たってうれしいけど、痛い。

「理化あ、朝から元気がいいわねえ。ちよつと今ストレスが溜まつててね。ストレス解消のためにちよつとつきあつてねええええ」

「死ぬ！あ、ダメ！死ぬ！俺にそつち系の趣味はないから勘弁して！姉さん！」

姉が技の拘束を解くと、ため息を吐きながら、出口に向かっていく。

「早く支度しなよ？私は今日日直だからもう行くから。学校は8時30分から。今7時40分だからね。あと、その『姉さん』はやめてつて言つてるでしょ。私は『さん』付けされるのが嫌なの。敬意を込めて美科つて呼びなさい。」

「はいはい、美科。起こしてくれてありがとね。行ってらっしゃい。」

姉がドアを閉めると、部屋の中がシーンと静まりかえった。理化はもう一度仰向けに倒れると、白い天井を見つめた。

自分専用の、真っ白い部屋。

30畳ほどの、かなり広い空間だ。

自分の一族は、化学、科学、数学に秀でていた。理化もその例に漏れずに、いや、一族の中でもさらに天才と呼ばれるほど、化学と数学は秀でていた。

周りに天才と呼ばれるなか、その才能を妬む者も出てくる。

だが、理化は自分の才能を見せびらかすことなく、飛び級することもなく、普通の学校に通い続けた。

目立つことなく生活することで、自分の存在を忘れさせようとしたのだ。

その目的は成功し、自分のことを天才と呼ぶもの、才能を妬む者は少なくなった。

だが、秀でた才能を伸ばさないのは、宝の持ち腐れだ。それは、一族が許さなかった。

父親は、理化にこの白い部屋を与え、ここで勉強するように言った。

理化は一日中白い部屋の中で勉強した。勉強が、楽しかったからだ。そして理化が中学生になるころ、父親は一つの機械を、理化に渡した。

「これは、我が一族のなかで、代々継承されるもの・・・と言ったら、少し硬いかもしれんが、子供へと引き継いでいくものだ。お前は、私よりも優秀だ。この機械を完成させるには、時間と能力が足りない私よりも、まだ時間と能力があるお前に渡した方が良さだろうと考え、渡す。つまりこの機械は、空一族の技術全てが詰まっている。自分の目で見極め、自分の手で作り、自分で完成させなさい。」

父親が渡したものは、人が一人入れるほどの、カプセル型の機械だ。理化は一心不乱に機械を観察、改造した。

しかし、完成はしない。

その繰り返しを行うなかで、時間は当たり前のよう過ぎていく。そして理化はついに高校生になり、夏休みを迎える1ヶ月前まできていた。

理化はその苦勞を思い出しながら、立ち上がった。

寝ていても人は進歩しない。学校に行き、勉強しよう、と。

ドアノブを捻り、ドアを開け放つ。

朝日が理化に降り注ぎ、目に痛みが走る。一日中白熱灯の下にいた

のだから、目が慣れないのだ。

いい天気だなあ、と思いつながら、家の中へと入っていく。その顔には、花のような笑顔があった。

白い部屋の中で、時計がピピッと音を立てて、時報を告げた。

『ただいまの時刻、8時20分です。』

一日を楽しくする方程式（後書き）

更新は遅くなると思いますが、書いていこうと思います。

遅刻をなくす方程式

「最悪だあ！」

朝食のパンを胃に落としながら、理化は通学路を全力疾走する。学校までは走れば5分で着く。家に入るなり時計を確認し、絶望を味わったあと、5分以内に着替え、洗顔や歯磨きを終え、朝食を掴んで玄関を飛び出したまでは順調だった。しかし、鞆を家に置き忘れて取りに戻ったり、筋肉が断裂するかの如く足を攣ったのは、予想外だった。

朝のHRが始まるチャイムが鳴った2分後に、やっと教室の前に辿り着いた。

だが俺の顔に焦りはない。そう、足を攣ったときに最高の作戦を考えていたのである。

教室の後ろ側のドアを開け放つ。その迫力、まさに歴戦の武将を思わせる勢いだった。

担任の先生、いくたえり育田英利が、長く綺麗な黒髪を後ろにかきわけ、眼鏡をかけなおすと、溜め息を吐きながら「言い訳をどうぞ」って言うってくる。

俺は「それがですね」と前置きしてから、話し始める。この作戦には、自信がある。

「実は、今日は家を早め出てたんですよ。姉と一緒に家を出て、2分ほど歩いていたら、女性が一人道を行ったり来たりしていたんです。俺は、道にでも迷ってるんだと声をかけました。そしたら女性は「お願い来て！」と言うなり、僕の手を引っ張っていったんです。どうしたんだろう？と疑問に思いながら、このままでは学校に遅れてしまう！とも思いました。だけど、その女性の不安を必死で隠そうとしているその顔に、僕は『学校に遅れるから放してください』とは、とても言えませんでした。」

クラス全員が俺の話に耳を傾けている。そう、みんな俺の術中に

はまっているのだ。

俺はニヤリと口を歪めそうになるが、それをなんとか抑える。

だが一人だけ、俺の術にはまらず、頼杖をつき、あくびをしている男がいる。窓際後方三番目の男。

その男は、俺に口パクで「バーカ」と言った。こいつ、俺の作戦を理解しているのか！？

そう、俺の作戦とは『時間稼ぎ』だ。

この清南高校のHRは、たった10分しかないのだ。

俺の遅刻によりすでに2分が消費されているため、残り8分。そして俺の語りによってもう2分を消費した。

残り6分。

ここから始まる、俺の壮大で、心躍らせる物語を話していれば、あつという間に時間など過ぎてします。

そうすれば、一時間目の教師が教室にきて、遅刻のことをうやむやにできる、という作戦だ。

だがここからが一番難しい。

そう、自分だけの語りの空間を作り、相手を夢中にしなければならぬ。このような状況を、漫画などでは『固有結界』と呼ぶらしいが、その固有結界を完璧なまでに張らなくてはいけないのだ。

だが、例の男はその結界を、ぶち壊した。一言、発するだけで。

「で、結局？」

男は口を邪悪な形に歪める。俺の術にかかっていたクラスメイトたちが正気を取り戻す。

そう、この通称固有結界は「結局？」とか「で、最後は？」とか聞かれると弱いのだ。その手の質問を投げかけられると、結末を言わなくてはいけない。その後の話の展開が消滅してしまうのだ。

俺が奥歯を噛み締めながら、男をにらみつけるが、男は余裕の笑みを浮かべている。

「ふむ、どうなったんだ？」

と、英利が繰り返し、俺の首をさらに締め上げる。真綿で首を絞め

られているかのように息苦しい。

「え〜とですね・・・」

「いや、もう無理をするな、理化。お前の姉とは朝に一度会っている。そのときに『理化は私が出るときに起きました』と、言質もとつてある。あと1分ほど語っていたら、私も同じ質問を投げかけていただろう」

なん・・・だと・・・!?俺が語りだして数秒で結界は破綻していたということか!?

冷や汗が背中を伝っていくのを感じながら、英利の決断を待つ。

英利は一度溜め息をつく、次はクスクスと笑い出した。

「まあ、いいだろう。今日はその面白い話をしてくれたことに免じて、お咎めは無しだ。席に着け」

ホツとすると同時に、男への怒りがまた噴き出してきた。

その男が言わなくても、結局英利によって追い詰められていたのだが、そのことはどうでもいい。

俺は自分の席に座る。その男の、後ろの席だ。窓際後方二番目。

「時雨、ちよつと拳で語り合おうぜ。」

「おいおい、汗臭いのは好きじゃないんだよ。お前だって喧嘩得意じゃないだろ。」

「男はな、やらなきゃいけないときがあるんだよ。」

「それは絶対今じゃないと思うけどな。別にいいじゃんかよ、俺が言わなくたって英利は元々知ってたんだから。そう機嫌を悪くするなよ」

男の名前は東雲時雨。かなり美形で、身長も172?の理化よりさらに10?も高い。

漆塗りのような美しい黒髪をし、眼鏡をかけている。その美形と性格の良さから、女子にモテモテである。勉強もなかなかできるため、隙あれば今度暗殺しようと思っている。

「そうよ、あんたが悪いんだからしょうがないじゃない」

後ろから声をかけられ、振り返る。

薄い茶色が入った黒髪をポニーテールにし、勝気そうな目を細め、腕を組んでいる。幼馴染の湊みなと笛音ふえねだ。Bカップぐらいの胸を組んだ腕に乗せて強調しているように見えるが、なんだか少しだけ悲しくなってくる。小さいなあ。別に小さいのが嫌いなわけではない。Cぐらいがベストだと思うが、無理矢理強調しようとしてるのが・・・不憫でならない。

「・・・人の胸をジロジロ見ないでよ。」

「いや、不憫で」

「不憫言うな！すいませんねえペツタンコで。そんなに大きいのを見たいなら英利先生とか自分の姉の見りゃいいでしょ！」

たしかに俺の姉、美科はCカップでベスト！と叫びたくなるほどだ。そして英利はDかEで生徒間の論争が絶えない状況だ。つまり、でかい。

だが個人的に言わせて貰えば、大きいより小さいほうを選ぶのが紳士というものではないだろうか。

この話が英国紳士に聞かれたらぶっ飛ばされそうだが、そんなことは気にしない。

「俺は小さいほうがいいな。大きいのはあんまり好きじゃない。」
笛音が頬を少し赤らめると、「バカ」と言って俯いた。なんだ、突然。風邪か？まあ、可愛いから放って置こう。

すると突然肩を捕まれ、有無をいわさず前を向かされる。

「なるほどな。お前は遅刻、謎の語りによってHRの時間を奪ったあげく、女子に胸の話をして赤面させる、セクハラをしに学校に来ているのだな。素晴らしい趣味だな。その性癖には恐れ入るよ」

「別にそんな性癖はない・・・。先生、時間もなしHRの続きを・・・」

自分の顔が引きつっているのを感じながら、英利の笑顔を見る。

英利の顔には、とても美しい笑顔が張り付いていた。

英利は二十一歳後半なので、大人の魅力に溢れた美しい笑顔だった。それに、英利は元々美人なので、その笑顔は太陽のような暖かいを

持ち、花のような華やかさも持っていた。

英利は鼻で笑うと、

「ふむ、たしかにHRも大切だ。だがな、セクハラを受けている生徒を助け、セクハラをした生徒を教育し直すのも大切だと思わんか？

「だから、セクハラなんてしてないって！な、なあ、時雨」

顔の血が引いていくのを感じながら、英利から視線を外すことなく、前の席に手を伸ばすが、何も掴めない。

「おっと、消しゴムが」と言いながら離れていく時雨の気配で感じ取れる。逃げやがった。

「なあ、笛音。俺はセクハラなんかしてないよ・・・」

笛音に話し話しかけながら振り返る。

「空が、綺麗ね」と言いながら遠い目をしている笛音がいた。こいつも逃げやがった。

最後におそろおそろクラスメイト達を見るが、みんな熱心に一時間目の化学の予習をしてやがる。

お前らそんなに勉強熱心だったか！？

英利を見上げると、美しい笑顔のままだった。俺も、微笑んだ。人間、追いつめられると最後にでるのは、やっぱり笑いなんだと、つくづく思った。

「罪には罰だ。そうは思わんか、理化？」

1年7組から、ボロクズのようなものが廊下に投げ出された。

遅刻をなくす方程式（後書き）

これから更新ペースが一気に遅くなると思いますが、よろしく願
いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4434ba/>

理化の解答（仮）

2012年1月14日13時50分発行